

「めのまへ性」という観点の導入による、

古代語助動詞の分類に関する一卑見

坂田 一 浩

日本語研究者も日々腐心しているという古代語助動詞の分類、並びに意味記述に関して、今のテンス・アスペクト研究の流れとは少し違った視点から、卑見を述べたいと思う。ちなみに私は、現在の文学・語学のあまりに乖離した研究状況ならびに、古代の文学作品を単なる言語分析の物的対象としてしか捉えず、古代人の思考にそれこそ「想像的に」分け入っていかうとしないう今の日本語学の研究状況に、甚だ疑問を感じている者である。

本題に入る。私見によれば、古代日本語のいわゆる、過去、完了、推量の助動詞は、現在日本語研究で流行りの、テンス、アスペクト、モードといった枠組みに先行して、なによりもまず「めのまへ性」という概念によって二分されるべきものであると考える。

ここでいう「めのまへ性」とは、ごく単純にいえばある事象が、発話時に表現主体の目の前にあるか、ないかを問題とす

る概念である。そもそも古代の人々にとって、表現の対象となる事象が、自己の眼前にあるか、ないかということは、非常に重要な事柄であったと考えられる。その区分は、飛行機やインターネットに象徴されるような高速の交通、通信手段の発達により、今日の前にない、はるかかなたの事象を、短時間で「目の前」にすることができる現代人にとっては、想像を絶するものではなかったか。古代から近代、現代への流れはその意味でまさに、人間の認識においてこの、「めのまへ性」の区分が希薄化してゆく過程であるとも捉えられる。ところで、ある時代の人々が共有していた事態把握様式というのが、彼らの使用していた言語のある特定の形式に反映されるといふことは、往々にしてみられる現象である。私はこの「めのまへ性」という、古代における事態把握の様式が、通行の文法書というところの過去・完了・推量の助動詞において端的に示されていたであろうと考えるものである。²⁰

以上の見通しのもとに、ここで早速、この「めのまへ性」という観点を導入しつつ上記の助動詞のいくつかを試みに二分してみる。まず「めのまへ性」を表すものとして典型的なのが「たり」「り」であろう。これらは基本的に、発話時に表現主体の眼前で展開されている動作・状態について述べるものだからである。また推量に属する「めり」「なり」も、基本的には「めのまへ性」を表すものであろう¹⁾。

一方これと対立する、「非めのまへ性」を表すものとしては、いわゆる過去の、直接経験を表すとされる「き」、また推量の「む」「じ」「けむ」、さらに典型的にはいわゆる反実仮想の「まし」がこれに該当しよう。とりわけ「まし」は、そもそも現実にはありえないことを仮想するわけであるから、表現主体の眼前に現出し得ないものであること、いうまでもない。

では通常「き」と対比させて論じられることの多い「けり」はどうであろうか。通行の文法書の記述によれば、「けり」には「間接経験」「気づき」の二つの意味があるという。

ここでいう「間接経験」といわれるものが、上代の伝説や、平安物語の地の文において用いられる左の例のようなもの、

・千沼壮士 菟原壮士の 伏せ屋焚き すすし競ひ
相よばひ しける(家類) 時には・・

(万・一八〇九)

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなききはあらぬが、すぐれて時めき

たまふ、ありけり。

(源氏・桐壺25)

すなわち、細江説にいう「伝承回想」であると理解するならば、この用法は「非めのまへ性」ということになる。一方、今一つの「気づき」は明らかに「めのまへ性」を示している。何となれば「気づき」の「けり」は、

木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり
(古今一八四)

右の和歌においても典型的に見られるように、まさに発話時、表現主体の眼前に現出した事態を表明するものだからである。

以上のように「けり」は、「めのまへ」「非めのまへ」の双方にまたがったものと見なされる。ところで、この両区分にまたがるとみられる助動詞は、実はもう一つある。「らむ」がまさしくそれである。「らむ」の意味のうち現在推量といわれるものは、一般的な説明でもわかる通り、発話時に表現主体の眼前になく、かつ発話時点において生起している(と主体が認識している)事象について述べるものである。それに対して原因推量といわれるものは、まさに発話時点で表現主体の眼前に生起している事象について、文字通りその因り来たるところを推量するものだからである。

以上述べたところを簡単に図示すると、次のようになる。

「めのまへ」

たり・り

めり

なり

けり ———— らむ ————

き

む／じ

けむ

まし

「非めのまへ」

ここで、「めのまへ性」を示す助動詞を仮に「めのまへ助動詞」、それに対して「非めのまへ性」を表すものを「思ひやり助動詞」と呼ぶこととする⁽⁴⁾。

ところで、このように「めのまへ性」という観点によつて従来の助動詞区分を見直してみると、従来の区分では見えてこなかった助動詞相互の対応関係が浮き彫りになるように思われる。以下これに関して、次の三点に絞つて少しく私見を述べてみたい。

- 1、「き」と「む」
 - 2、「き」と「けり」、とりわけその意味記述に関して
 - 3、「けり」と「らむ」
- まず、「き」と「む」は、学校文法ではそれぞれ過去・推量

というように全く別のカテゴリーに所属させられているが、この「めのまへ性」という点から改めて両者の用例を眺めてみると、

・まだ文章の生に侍りし時、かしこき女のためしをなむ見給へし。
(源氏・帚木73)

頭の中將にこれを見せたらむ時、いかなることをよそへ言はむ、
(同・末摘花40)

・わがまたぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず
(古今・三三三八)

思ふともかかなむ人をいかがせむあかず散りぬる花とこそ見め
(同・七九九)

・「かの中將にも伝ふべけれど、いふかひなきかごと負ひなむ。とざまかうざまにつけて、はぐくまむに咎あるまじきを、そのあらむ乳母などにも、ことざまに言ひなして、ものせよかし」など語らひ給ふ。・竹のなかに家鳩といふ鳥の、ふつつかに鳴くを聞き給ひて、かのありし院に此の鳥の鳴きしを、いとおそろしと思ひたりしさまの、おもかげにらうたく思ほしいでらるれば、・・・

(源氏・夕顔143)

右のように、双方とも発話時点で眼前にない事象を「思いやつ」としているという共通の属性が見出される。ただその存在を表現主体が、現実世界に既に定位されたものとみなすか否かという点において、両者は対立を見せているのである⁽⁵⁾。

次に「き」「けり」の意味記述に関しては、いまだに混沌たる議論が繰り広げられて定論を見ないようであるが、これも「めのまへ性」という概念を導入すれば次のようにある程度はすつきりと捉え直されるであろう。

そもそも、学校文法等、通行の文法書において「き」「けり」は

き——直接経験

けり——間接経験

気つき

と一般的に説明されているようであるが、秩序と体系というものに對して美を感じる心を持ち合わせている人であれば、この図式はあまりにもいびつなものに映るのではないだろうか。まず「き」の意味が一つであるのに対して「けり」は二つ、さらに直接・間接経験の両者は対応する（と見える）にしても、「気つき」の位置づけがいかに宙ぶらりんである。そもそも「けり」の一語においてこれらの意味が併存する、その関係性と理由がどうしてもみえてこない。少なくとも私は、高校時代からこの点に甚だ釈然としないものを感じてきたのである。

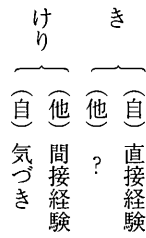
「名付ける」という行為は本当に恐ろしい。あるいくつものものが不当に名付けられることよって目が曇らされ、相互の関係を根本的に見誤る、このようなことが世の中には往々にして存在する。ここがまさにその典型的な例である。少なくとも

私はそう考える。「直接経験」「間接経験」と名付けてしまうと、両者がきれいな対応をなすものと、つい錯覚してしまう。だが事の本質はそうではない。じつは直接経験にびたりと対応するのは間接経験ではなく、「気つき」の方なのである。理由を示す。

今、直接経験ならびに気つきということをも、「めのまへ性」という概念を用いて読み換えてみる。直接経験とは表現主体が以前、「めのまへ」に経験したこと、すなわち、発話時点たる現在ではすでに消失して目の前に存在していない事象、ということである。一方気つきとは、ある事象の存在を、表現主体が発話時において「めのまへ」に新たに認識したことを示している。両者はいずれも表現主体の直接の経験を述べており、この点は共通している。その一方で「き」は発話時点にはすでに消失している事象、「けり」は発話時点において新たに現出した（と主体に認識される）事象であり、この点において際立つた対照をなす。すなわち両者は共通性と対照性を併せ持った、非常に美しい対応をなしているのである。このことが今までなぜ見えなかったのか。理由は単純、意味記述の段階で、その特性をきちんと分析的に比較検討しないまま、安易にラベリングを施してしまったからである⑤。

ところで、秩序と体系に対して美を感じる心は、ここで納得してはいけぬ。今度は間接経験の方が宙ぶらりんになってしまふからである。ここで、より整然とした、美しい対応がないか、さらに想定してみる。少なくとも私は、古代の日本語には

随所にそれがみられると確信しているからである。さきに私は、いわゆる「直接経験」「気づき」は双方ともに表現主体の直接の経験を示すものである、と述べた。現時点で宙ぶらりんとなっている「間接経験」とは伝承などの、表現主体自身の直接的経験でない、他から伝え聞いた内容である。つまりこれを前二者と突き合わせると、そこには「自〇他」という対立構造が見出される。すなわち簡単に図示すると、



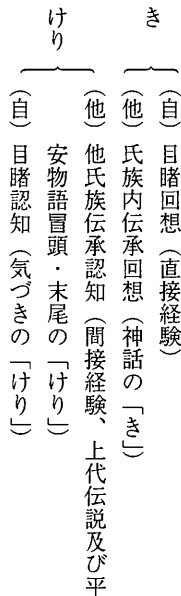
ということになる。ここでもし、「けり」の間接経験に対応するものが「き」においても見出されれば、非常に秩序ある図式となる。これに相当するものがどこかにないものか。実は、ある。上代において、

香具山と耳梨山とあひし(之) 時立ちて見に来し(之) 印
南国原 (万・一四)

右のように、万葉集や古事記などに典型的に見られる、神話を語る際に用いられる「き」がまさしくそれなのである。これは従来から「き」の本質的性格が表現主体の直接経験を表すものとされたために、その例外としてたびたび問題とされてきたも

のである。しかし「めのまへ性」という概念を導入して「き」「けり」の用法を改めて捉え直すことにより、この、例外的用法がきちんとした対応をなしつつつ位置づけられることとなるのである。

以上の検討を踏まえた上で、「き」「けり」相互の意味的対応がよく見えるように個々の用法を名づけてみると、およそ次のようにならうか²⁾。



私は少なくとも、上代における「き」「けり」の意味記述の枠組みは、このように想定されるべきであると思うのである³⁾。

最後に、「けり」と「らむ」の関連性について一言しておきたい。この両者は、既述のようにその用法が「めのまへ」「非めのまへ」双方にまたがっている点でよく似たふるまいを見せているが、これは決して偶然ではない。私見によれば「けり」「らむ」は、その意味用法において、密接な対応関係にあるものと考えられるのである。

まず「けり」の「気づき」の用法は、「めのまへ性」を示す

という点で、「らむ」の「原因推量」に対応するものと一応みられるが、ここで改めて、この、「原因推量」という語の意味するところを慎重に吟味する必要がある。すなわち、「けり」の示す「気づき」という状態（つまり、あることに思い至った、確信をもって「気付いた」といえる状態）と突き合わせてみると、「原因推量」とは、まだそこまで思い至らず、「気付かない」状態、あるいは、気付いていてもそのことに確信が持てない状態、と捉えることができるのではないか。だからこそ

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらむ

(古今・一九四)

秋萩にうらびれをればあしひきの山下とよみ鹿の鳴くらむ

(同・二二六)

右の例のように「くづば」の部分で眼前の現象の原因を提示しながらも、どこかにそれに確信の持てない状態、ある種の「いぶかしみ」が感じられるのであり、これは、「気づき」の「けり」において同じように原因を提示する「ば」が共起した、おほぞらの月の光し清ければ影見し水ぞまづこほりける

(古今・三二六)

吹く風の色のちくさに見えつるは秋の木の葉の散ればなり

けり

(同・二九〇)

右のような例において、眼前の事態の原因がこうであったと、確信をもって言明するのはきわめて対照的なあり方といわねばなるまい。このような「けり」と「らむ」の対応は、次の二

首の対においてもつとも顕著に窺えるであろう。

おなじ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

(古今・二五五)

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ

(同・三三〇)

さらに源氏物語の会話文においては、不定語(いわゆる疑問詞)と共起した「らむ」は、「なりけり」構文をその典型とする気づきの「けり」と対照させてみると、「気づかぬ」状態から「気づいた」状態へとという対比の様相が、明確に捉えられるであろう。

命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ。

(源氏・夕顔 130)

われはいかなる罪を犯してかく悲しき目を見るらむ。父母にもあひ見ず、かなしき妻子の顔をも見で死ぬべきこと。

(同・明石 67)

「年はいくつにか物し給ひし。あやしく、世の人に似ずあえかに見え給ひしも、かく長かるまじくてなりけり」と宣ふ。

(源氏・夕顔 143)

御文もろともに見て、心の中に、「あはれ、かうこそ思ひの外にめでたき宿世はありけれ。憂きものはわが身こそありけれ」と、思ひ続けらるれど、

(同・濤標 115)

このような「けり」「らむ」の対照は、前者を「気づきの『けり』」と呼ぶならば、後者は「気づかぬ『らむ』」とも言うべ

き表現性を備えている。

では、非めのまへ性の用法における「けり」「らむ」の関連性はどうかであろうか。まず「らむ」の「非めのまへ」の一用法と目されるものに、従来から指摘されている、

かの御おば北の方、なぐさむ方なく思ししづみて、おはずらん所にだにたづね行かんと願ひ給ひししるしにや、つゝらうせ給ひぬれば、
(源氏・桐壺40)

鸚鵡、いとあはれなり。人のいふらんことをまねぶらんよ。

(枕草子・鳥は)

右のような「伝聞」といわれるものが存在する。一方「けり」

に関しても、既に中西宇一(一九六三)等に指摘があるように、このかみの聖のかたに、源氏の中將の、わらはやみまじなひに物し給ひけるを、只今なむ聞きつけ侍る。

(源氏・若紫158)

思ひのほかに、(源氏ノ)かくておはしましける御やどをまかり過ぎ侍る、かたじけなう悲しうも侍るかな。

(同・須磨53)

右のような「伝聞」を示すと考えられるものが中古の作品には散見され、これもやはり非めのまへ性を示す用法と見られる。両者は同じく伝聞といわれるものでありつつも、前者はその伝聞内容を不確かなものとして、また後者はそれを確かなものとして表現主体が捉えていることを示すものである、と一応は考えられよう。ここにおいて我々は、「めのまへ」「非めのまへ」

双方の領域において、「けり」「らむ」の対応関係を窺わせる事例を確認することができたのである¹⁰⁾。

以上のようにみえてみると、今見てきた「けり」と「らむ」の対応が、さきに述べた「き」―「む」の対応の延長線上に位置づけられるのではないかという見通しも浮かび上がってくる。今、過去推量といわれる「けむ」も含めてこれを簡単に図示すれば、

「き」――「けり」
(確定系列)

⇔

「けむ」―「らむ」―「む」
(不確定系列)

ということになるかと思われる¹¹⁾。

このように、「めのまへ性」の有無という捉え方は、古代語助動詞の分類ならびに興味記述における、一つの重要な枠組みを提示するものと考えられるのである¹²⁾。

【注】

(1)「メノマエ性」という概念は、松本泰丈(一九九三)によって提起され、さらに鈴木泰(一九九五)によって古代語研究への応用が試みられたものであるが、本稿で意味するところは鈴木のと大きく異なる。まず、氏のいう「メノマエ性」は「たり」「り」を始めとするアスペクト助動詞を説明するためのものであるが、私はこれを、いわゆる

テンス・モードを表すとされる助動詞にまで押し広げてこれらを統一に分類・説明するために用いるものとする。また、氏の意味するところは（恐らく提唱者である松本の規定もそうであろう）純粹に物理的な、客体世界を指しているようであるが、私はこれを、表現主体の対象への感情、志向をも含めた、主客融合した概念として捉えるものである。これに関しては稿を改めて詳論したい。

また、この「めのまへ性」という概念は、古典文学研究においても非常に重要な概念たり得るかもしれない。典型的な事例を二つだけ挙げる。まず、源氏物語の地の文における「けり」の検討を通して竹岡正夫が見出した、「物語のあなたなる世界」という概念はまさしくそれであろう。「非めのまへ」である「あなたなる世界」に対して、物語の現場たる「こなた」の世界はまさしく物語の語り手、読者にとつては「めのまへ」の世界である。次に和歌に関していえば、通常文学史において万葉集の、対象を直叙する歌風から、古今集の理知的、観念的な歌風へという変遷過程が説かれるが、高校時代の私は当時の理解力不足もあって、この説明（特に古今）の意味するところがどうもピンとこなかった。しかしこれを今「めのまへ性」という概念で読み換えてみると、「めのまへ性」を示す歌が圧倒的に多く、かつ「非めのまへ」の事象を詠んだ歌とそれが割合明確な区別をたもっていたのが万葉集、これに対して「非めのまへ」歌の比重が増し、かつ「めのまへ」「非めのまへ」の両事象を、共通項をもって一首のうちに巧妙に組み合わせた歌が見られるようになるのが古今集、ということになるのか。なお、本稿における「めのまへ性」という概念は、平安朝屏風歌に

おける屏風絵鑑賞者の認識過程と詞書との関係をめぐる考察から導き出されたものであることを、念のため付け加えておく。これに関してその後日稿を改めて私見を述べる予定である。

(2) ここで改めて、なぜ「めのまへ性」という観点を導入する必要があるのかという点につき、確認しておかなければならない。その理由は次の二点である。まず、注(1)において既に述べたように、古代の文学において「めのまへ性」という枠組みが、韻文、散文を通じ、作品の基本構造に非常に深く関わっているという点である。このことは、古代の人々がある事態を把握、表現する際、それが「めのまへ」にあるかないかということが非常に重大な関心事であったということを端的に示すものだと考えられる。その区分を示す際、「けり」「らむ」をはじめとする助動詞が重要な指標として機能していたことは注意されてよいであろう。他方、古代語助動詞のこれまでの研究史を通観してみると、実はいくつものものについて、しばしば「めのまへ性」に相当する事柄が云々されている。よく知られているところでは、推量の「らむ」の意味記述において、述べたてる事態が「眼前に」あるかどうかにより、原因推量と現在推量との区別が行われている。また、鈴木泰(一九九五)では、完了の「たり」「り」「さらには」「つ」「ぬ」が、氏のいうところの「メノマエ性」という枠組みによって分析されている。さらに過去の「き」「けり」に関しても、日本国語大辞典では、それによって述べたられる事象が「目の前に」あるかないかという点から、意味記述がなされている。このように、いわゆる推量・完了・

過去の区分にまたがって、いくつかの助動詞において、「目の前に」あるかないかという点が問題になり得るといふことは、そもそもこれらすべての助動詞が「めのまへ性」の有無によつて区分されることを、その体系自体が要求しているという事実を暗に示すものではないだろうか。本論はこのような見通しを前提とするものである。

(3) 今は議論を単純化するため、いくつかの助動詞を例示するにとどめ、全体的な構想は後日稿を改めて公開するが、ただ次の二点だけは補足しておく。まず、本文では触れなかつた完了の「つ」「ぬ」に関して、鈴木泰(一九九五)は両者とともに、氏のいう「非メノマエ性」の助動詞と捉えているようであるが、私見によれば「つ」の「非めのまへ」に対し、「ぬ」は「めのまへ性」の助動詞ではないかと思われる。こう考えることで、「き」⇕「つ」(気づきの)「けり」⇕「ぬ」という対応が見えてくるように思われるからである。またここで、いわゆる伝聞推定の「なり」を「めのまへ性」のものとして位置づける処置については異論があるかもしれない。「伝聞」とはそもそも、「めのまへ」にない事象を「伝え聞く」行為だからである。しかし、その上代における用例をみる限り、

眺に名告り鳴くなる(奈流)ほととぎすいやめづらしく思ほゆる
かも
(方・四〇八四)

のように發話時点で表現主体の眼前にある聴覚現象を述べたてるものが圧倒的であり、それが本来的な用法であつたと考えられる。あえて「めのまへ性」の助動詞として位置づけた所以である。

(4) この名称は平安朝和歌にみられる左記のような例からそれぞれとつたものである。

来む世にもはやりななむのまへにつれなき人を昔と思はむ
(古今・五二〇)

思ひやるさかひはるかになりやすまどふ夢路にあふ人のなき
(同・五二四)

これらは当時の人々の、「めのまへ性」の区別に基づく事態把握様式を端的に示すものと思われる(ちなみに片桐洋一の古今注では「名義抄」の「生前」の語に「メノマへ」の訓があることを指摘する。一考の余地がある)。なお、源氏物語には左に示すように、「思ひやる」という語が「らむ」と共起している例が数多く見出される。「らむ」と「思ひやる」という行為のつながりを示すものとして興味深い。

たちさまよふらむ下つ方思ひやらるる心地す。(源氏・夕顔105)

五月五日ぞ、五十日にはあたるらむと、人知れずかずへ給ひて、ゆかしうあはれに思しやる。(同・薄標114)

(5) 従来「仮定・婉曲」と称されてきた連体修飾節中の「む」に関して、近年高山善行等による再検討の動きがあるようであるが、私は例えば「死にし子」のような「き」の連体用法との対応をきちんと検討しない限り、その本質は見えてこないのではないかと考えている。また、本文では「き」と「む」の相違を「現実世界に既に定位されたものとみなすか否か」とやや抽象的な表現を用いたが、このあり方はあるいは、フランス語の動詞叙法における直説法(mode indicatif)と接

統法 (mode subiectif) の対立に近い点があるかもしれない。

(6) このことを端的に裏付ける例として、古典和歌においてはいわゆる直接経験の「き」と気づきの「けり」との対応を示す例が随所に見られる。

妹として二人作りし(之) 吾が宿は木高く繁くなりける(家留)
かも (万葉・四五二)

かくのみにありける(家類) ものを芽子の花咲きてありやと問ひし
(之) 君はも (同・四五五)

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし桜もうつろひにけり

(古今・八〇)

白玉と見えし涙も年ふれば唐紅にうつろひにけり(同・五九九)
かく恋ひむものとは我も思ひにき心の占ぞまさしかりける

(同・七〇〇)

君こふとぬれにし袖のかわかぬは思ひの外にあればなりけり

(後撰・五六二)

ちなみに、古今集においては一一〇〇首中、約二パーセントにあたる二二首にこの対応が見られる。

(7) いわゆる間接経験の「けり」と神話の「き」との間に対応関係が見られるとして、両者の相違は果たしてどのような点に基づくものであるかが問題となろう。私はこれを、氏族制度を基盤とした上代において、伝承というものがどのように捉えられていたかに起因するものと

みる。すなわち、氏族意識が強固であった時代では、自己の属する氏族の持っていた伝承と、他氏族のそれとは明確に区別されていたものと考えられ、「き」「けり」はまさにこのような、氏族伝承の捉えられ方に対応しつつ機能していたと思われるのである。左表において、「氏族内伝承」「他氏族伝承」と名づけたのはこのような理由による。

実は「き」「けり」に関する以上のような記述は、加藤浩司(一九九八)の述べるところとかなり重なる部分がある(同書第一章の四、「助動詞キとケリの機能」の項)。ただ氏は、「き」と「けり」の違いを、伝承内容の権威性の有無という観点から捉えているようであるが、私はむしろ、両者の根本的相違は、自己の属する氏族、すなわち身内の伝承には「き」を、また他所の氏族、他地方の伝承には「けり」を用いるという、いわゆる「ウチ——ソト」の対立構造をその背景にもつものと理解すべきだと考える。古代の人々にとって、他所の氏族の伝承は新奇なものとして映ったに違いない。だからこそ「けり」を用いたのであり、そこから、いわゆる気づきの「けり」の、目の前に現出した新たな事態を、驚きをもって迎えるという性格との通有性も浮かび上がってくるように思われる。この点で、三谷栄一(一九五二)が物語の発生を、氏族制度の崩壊によりそれまで各氏族が持っていた伝承が対社会的に流出、衆目のもとに晒され、それが好奇の目をもって迎えられるところに見ようとしているのは、この場合参照されてよいであろう。

なおここで、表における(自)(他)の項目を通じてみられる、「き」「けり」それぞれの本質的性格について指摘しておく必要があるだろう。これについて、私は今のところ、「き」の内在記憶(自)≡自己の脳裏

に既に刻み込まれた事態、(他) ≡ 自己の属する氏族内部に守り伝えられている伝承) に対して、「けり」の外來情報(自) ≡ 自分の意識に新たにやって来た情報、(他) ≡ 他氏族の伝承) というウチ↓ソトの対立として捉えることができるのではないかと考えている。あるいはこれを、旧情報(既知)、新情報(未知)の枠組みで捉えることもできるかもしれない。さきに注(6)において示した和歌における「き」「けり」の対応は、暗にこのことを示しているようにも見える。

(旧情報)

(新情報)

白玉と見えし涙も年ふれば唐紅にうつろひにけり

(8) ただ、ここに示した図式はあくまで上代におけるものと考えられるため、中古においてはこの枠組みに収まらないと思われる例が存在する。例えば源氏物語の「き」における、

か、のいざよひのさやかならざりし、秋のことなど、さらぬも、

様々のすきごとをも、かたみにくまなく言ひあらはし給ふはては
ては、
(源氏・葵115)

にみられるような、物語において当該箇所に行先する叙述を指すと思われるもの。これは以前から、直接経験を示すとされる「き」の例外的用法としてしばしば問題となっていたものである。また「けり」においても、

皆しづまりたるけはひなれば、かけがねを試みに引きあげ給へれば、あなたよりは鎖さざりけり。
(源氏・帚木82)

に典型的にみられる、竹岡正夫(一九六三)が「物語のあなたたる世

界」を示すとしたものがある。ちなみに今の私の見通しでは、前者は時間週及作用、後者は場面並列作用をその基本的な性格として保ちながら、両者は物語における語りの構造を形成する上で、密接な対応を示しつつ機能していたものと考えている。あるいはこれらは源氏をはじめとする物語において、より機能的な語りの構造が追求される過程で産み出され、特化された特殊なものとして位置づけるべきか。これについては後考を俟つ。なお、本文の図式における「回想」「認知」という語はそれぞれ英語の“recall”“cognition”に相当するものであることを一言しておく。

(9) ここに挙げた「けり」「らむ」の「伝聞」といわれる用法が、それぞれ「けり」「らむ」の「間接経験」「現在推量」といわれるものを含めた諸用法の中に、どのように位置づけられるかについては、両助動詞の本質にも関わる、非常に重要かつ微妙な問題であるため、現段階では安易に断定を下すことを避ける。ただ、この「伝聞」といわれるものが、少なくとも「非めのまへ性」を示す一用法であることは認められてよいのではないか。ちなみに、「けり」「らむ」の伝聞と見られる用法に關して、確認され得るほとんどの用例が連体形をとっているということも、その密接な関連性を窺わせるに足るものである。

(10) 「めのまへ性」という区分に位置づけてみた際、「けり」「らむ」が軌を一にするふるまいを示すということは、それぞれの語源からもある程度裏付けられるのではないか。すなわち、「けり」は「來あり」、ま

た「らむ」は「あらむ」をその起源にもつとされている。これをもし次のように図示するならば、

来—ありむ

そこには共通の要素として「あり」を含んでいることが見てとれる。

実はこの「あり」こそが、古代語において「めのまへ性」を象徴的かつ端的に示すものだったと考えられるものであり、このことはさきに挙げた、「めのまへ性」を示す助動詞「たり」「り」「めり」「なり」がいずれもこの「あり」を構成要素にもつことから首肯されるであろう。

ちなみに、今の私は、古代語において形容詞の補助活用、形容動詞、多くの助動詞がその構成要素に「あり」を含むということも、それがこの「めのまへ性」を明示するものとして機能していたからではないかという見通しをもっている。

(11) ここに示したように、過去を表すといわれる「き」と最も直接に対応するのは、過去推量といわれる「けむ」であろう。ただ、「けり」は諸例を見る限り、発話時点における現在から過去に至るかなり幅を持った時間を示し得るため、表に示した如く、場合によつては「らむ」のみならず「けむ」とも対応をなしうるものと見られる。また「き」と「む」は、表現主体にとつて最も現実世界に確実に定位できる事象と、最も定位が不確実な事象を表すという点で、この図式においては対角線をなして対応するものと考えられる。

(12) 山口明穂(一九八九)の次の指摘は、いわゆる時の助動詞と推量の

助動詞との間になんらかの関連性を認めているという点において、私が本稿で示したとことと根底において相通するものがあるだろう。

この、「らむ」「けむ」がそれぞれ独自の意味を失うのは、先に述べた「き」以下の時の助動詞が消滅するのと、ほぼ同じ時期である。

(前掲書、二〇〇頁)

さらに古代語から近代語に至る助動詞の変遷において、「き」「けり」「つ」「ぬ」が「たり」の後身である「た」に吸収されていく過程は、「めのまへ」「非めのまへ」の区別が消滅してゆくことの表れとして捉えることもできるかも知れない。とはいえこの「めのまへ性」という事態把握のあり方は、現代語においても形を変えてしばしば見え隠れする。例えば漫画や若者の言葉などにしばしば見られる、

とつとと俺の視界から失せろ！

という表現において、「失せろ」というのは存在自体の消失を問題とするのではなく、発話者にその存在が認識されるかどうかを問題としているのであり、まさに本稿でいうところの「めのまへ性」を象徴的に示すものであると考えられる。

参考文献

糸井通浩(一九八〇)「古代和歌における助動詞「き」の表現性」(愛媛大

学法文学部論集 文学科編)

加藤浩司(一九九八)『キ・ケリの研究』(和泉書院)

鈴木 泰(一九九五)「メノマエ性と視点(Ⅰ)——移動動詞の「たり・り

形と「ツツ形、くヌ形のちがひ——」(築島裕博士古稀記念 国語学

論集 汲古書院

竹岡正夫（一九六三）「助動詞『けり』の本義と機能——源氏物語・紫式部

日記・枕草子を資料として——」（『国文学言語と文芸』三二）

中西宇一（一九六三）「助動詞『けり』の間接性」（『女子大國文』三〇）

松本泰丈（一九九三）「メノマエ性」をめぐって——しるしづけのうつり

かわり——」（『国文学 解釈と鑑賞』五八一—七

三谷栄一（一九五二）『物語文学史論』（有精堂）

山口明穂（一九八九）『国語の論理 古代語から近代語へ』（東京大学出版

会）

本稿において引用した用例の本文は、万葉集、古今集、後撰集、枕草子は新大系本に、また源氏物語は角川文庫本によった。引例中、源氏物語の巻名の後に記した数字は、同書における頁数を示すものである。なお場合により、表記・句読点等、若干改めたところがある。

（平成二〇年十一月二十七日 脱稿）

（さかた かずひろ）

大学院社会文化科学研究科後期博士課程第一回修了）